

「この人を見よ！」

主任牧師：重田 稔仁

<メッセージ>

コリントの信徒への手紙二 4:16-18

この人を見よ！とはドイツの哲学者ニーチェの著作のタイトルです。

この著書でニーチェは、人間の道徳心、善悪の概念を否定し共感、同情を尊ぶキリスト教を徹底的に攻撃しています。

この著作のタイトルはヨハネ福音書 19:5

<見よ、この男だ>から取られたと言われますが。それはイエスを十字架につけよ！と訴えるユダヤ人の群衆の要求に応えられないローマの総督ピラトが敢えてイエスを蔑み、イエスの惨めさを際立たせるために語った言葉だと言われます。早い話、ピラトはイエスのうちにある神の子としての気高さ、真実が見えなかったのです。見えていたとしても認めたくなかったのでしょうか！

今朝はこの人を見よ！と題して、主イエスの雛形として知られる旧訳聖書の人物ヨセフの生涯から、見えない神を仰ぎ見る信仰の真骨頂についてお話ししたいと思います。

朗読

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

コリントの信徒への手紙二 4:16-18

創世記 30～50 章に登場するヨセフは父ヤコブの年寄り子として 11 番目に生まれた息子です。父は彼を溺愛し、息子たちの中で彼だけ野良仕事を免除し、袖の長い服を着させ、大事に育てたようです。そのせいかヨセフは、兄達から嫉妬され恨まれたのですが、若い頃のヨセフは鼻持ちならない人間でした。

彼は自分への父親の寵愛を当たり前のこととして受け止め、傍若無人に振る舞っていました。その一つの例が兄弟達のみならず両親までが自分に膝を屈めて仕える時が来ると暗示する夢を得意気に語ったのです。

そんなヨセフを憎悪した兄達が砂漠を旅するミデヤン人のキャバラン隊にヨセフを奴隷として売ってしまったため、彼はエジプトに連れて行かれ、エジプトの高官だった王の侍従長に奴隷として売られてしまいます。

その後、ヨセフはその有能な才覚と真面目な性格のおかげで主人の信頼を得て主の全財産を任せられるようになりましたが。好事魔多しとは良く言ったもので、そんな折主人の妻から性的誘惑を受け、それを拒絶したため彼女に逆恨みされ、ヨセフが彼女を辱しめようとしたと訴えられ、主人の怒りを買って、獄屋送りとなってしまいました。しかしそこでヨセフは獄屋番の信頼を得て囚人の世話係となります。そんなヨセフでしたが、獄中で出会ったエジプトの高官に引き立てられ解放され、その才覚と主に与えられた知恵によってエジプトの支配者の地位に上り詰めて行きました。正に人生上がってなんぼ！のヨセフの人生ですが、ヨセフについて特筆すべきことがあるとしたら、それは彼がどんな境遇におかれても、たとえそれが彼の落ち度に依らず、他人の悪意によって置かれた惨めな状況にあっても生きる希望を見失いませんでした。

それは…彼が人の目には見えないが確かに生きて働いておられる主なる神を仰ぎ見つづき生きたからです。

それは冒頭でお読みしたパウロの信仰告白にあるように！

すなわち、「わたしたちは

見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」

ヨセフが主なる神を仰ぎ見つづき生きたとは、どういうことか。

それは、ヨセフがいかなる境遇にあってもその背後におられる主の臨在と導きを信じて生きたということです。

では何故、ヨセフは目に見えない主なる神を仰ぎ見続けて生きたのか。

この問いの答えは、

人の人生は誰のものかという問いの答えのうちにあります。

ヨセフの生涯は、今申し上げた問いに対して、それは<主なる神のものだ！>と答えています。

ヨセフは自らの人生を「主なる神のものだと」認めていたからこそ、いかなるときにも主を仰ぎ見ることができたのです。ヨセフにとっては、主なる神のみが彼の人生を支配する主だったのです。だから、彼は自らの主である主なる神の導き、御心を慕い求めて、主を仰ぎ見て生きたのです。その結果、決して主にある希望を見失わなかったのです。

あなたや、私とその人生を主のものだと告白するとき、ヨセフがそうであったように、私
たちも主を仰ぎ見、主にあって希望を見出すことができます。

では、私の〈人生は、主のもの〉だと認めるとは、具体的にどういうことか。

それは、主はあなた以上にあなた自身を愛しておられるという真実を認めるということ
です。すなわち、主はあなたが自分を愛することを諦めても主は諦めないという真実を知る
ということです。

私たちの主イエスは、十字架に掛かる前夜、オリーブ山で1人、祈っておられたときご自
身の死を予見して絶望的な状況にありました。しかし、主イエスは父なる神様を仰ぎ見て
祈り続けました。

主イエスは十字架にかけられて、刻々と迫り来る死を前にしても父なる神様を仰ぎ続けま
した。それは、それはご自分は父のものだと認めていたからです。

みなさん、

キリスト信仰とは、主イエスは私が私を愛する以上に私を愛してくださっているという真
実を認め、主イエスを仰ぎ続けて生きることです。

主にイエスに目を注ぎながら、

今週も共にキリスト信仰の道を歩いていきましょう！

この人、イエスを見よ！と自分に言い聞かせながら。